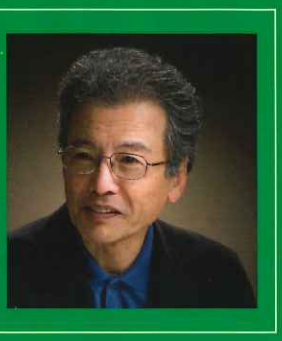
平成30年　前橋文学館友の会　新春イベント

対談

篠木 れい子氏
（群馬県立土屋文明記念文学館館長）

×



萩原 朔美 氏
（前橋文学館館長）

司会・進行

藤井 浩 氏
（上毛新聞社顧問・論説委員）

～「詩（うた）のまち前橋」の可能性～

萩原朔太郎の詩集『月に吠える』が発刊されたのは今から100年前、大正6年のことです。その前後から、朔太郎をはじめ、室生犀星、草野心平、高橋元吉、伊藤信吉ら多くの若き詩人たちが前橋を舞台に盛んに活動し、これが「詩のまち前橋」につながりました。今、その精神に学ぶべきものは極めて多いと思われます。そこで両文学館長に、彼らの足跡、「詩のまち前橋」の課題や可能性を語ってもらいます。

■ **日時**

平成30年2月10日(土)
14：00~16：00（13：30開場）

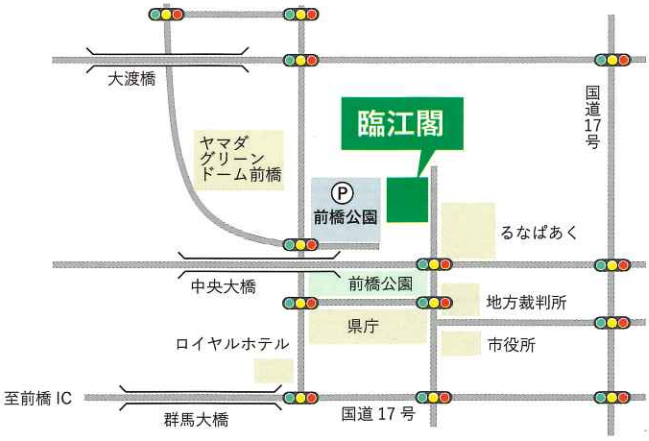
■ **定員**

200名（入場無料）※お申し込み順

■ **場所**

臨江閣別館2階大広間
前橋市大手町三丁目15番
027-231-5792

駐車場は隣接する
前橋公園駐車場（無料）を
ご利用ください。



■ **お問い合わせ／お申し込み**

萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち
前橋文学館
027-235-8011

平成30年1月13日（土）から受付開始

【臨江閣】

県庁にほど近い場所にある「臨江閣」は、第二期群馬県の初代県令であった楫取素彦（小田村伊之助）の提言で建てられた建物で、本館、別館、茶室からなる近代和風の木造建築物です。
本館は明治17年9月、楫取や市内の有志らの協力と募金により迎賓館として建てられました。現在は県の重要文化財に指定されています。本館と渡り廊下でつながる比較的大きな建物が別館です。別館は明治43年一府十四県連合共進会の貴賓館として建てられた書院風建築です。こちらは市の重要文化財に指定されています。

□**主催**：前橋文学館友の会　□**共催**：前橋市
□**後援**：群馬県立土屋文明記念文学館
前橋観光コンベンション協会、上毛新聞社
朝日新聞社前橋総局、毎日新聞前橋支局
読売新聞前橋支局、産経新聞前橋支局
日本経済新聞社前橋支局
群馬テレビ、エフエム群馬、まえばし CITY エフエム
□**協力**：萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち 前橋文学館

萩原 朔美
（はぎわら さくみ）

前橋文学館館長

1946（昭和２１）年、東京生まれ。映像作家、エッセイスト、多摩美術大名誉教授。母は小説家の萩原葉子、母方の祖父は萩原朔太郎。演出家として活躍の後、サブカルチャー誌「ビックリハウス」をパルコ出版より創刊し、初代編集長に。著書に『思い出のなかの寺山修司』『「演劇実験室 天井桟敷」の人々』『死んだら何を書いてもいいわ』の他、母親との共著『小綬鶏の家―親でもなく子でもなく―』など。2016年４月から現職。

篠木 れい子
（しのぎ れいこ）

群馬県立土屋文明記念文学館館長

1946（昭和 21）年、福島県生まれ。群馬県立女子大学名誉教授。東京都立大学大学院博士課程修了。高知女子大学（現・高知県立大学）文学部助教授を経て、1980（昭和55）年４月、群馬県立女子大学開学と同時に赴任。同大学教授（文学部長）を務めた。方言研究を専門として、群馬県各地で調査を行いながら、ことばからその生活世界を考えている。著書に『群馬の方言』『群馬県吾妻郡六合村の方言』『全国方言基礎語彙の研究序説』（共著）など。2012 年５月から現職。

藤井 浩
（ふじい ひろし）

上毛新聞社顧問・論説委員

1955（昭和 30）年、前橋市生まれ。慶応大学文学部卒。上毛新聞社会部、経済部記者、文化生活部長を経て２０１０年から７年間、論説委員長を務めた。文化誌「上州風」の立ち上げに関わる。「シルクカントリー群馬」キャンペーンの企画・紙面づくりを担当。著書に『「眠る男」の記憶』『誇りについて　上野村長・黒澤丈夫の遺訓』など。『群馬文学全集第 20 巻（思想・評論・随筆）』を編集。2017 年６月から現職。

前橋文学館友の会「連続講座」のご案内

◆**演題**：臨江閣周辺を往来した文人たち

◆**講師**：藤井 浩 氏　（上毛新聞社顧問・論説委員）

◆**会場**：前橋文学館３階ホール

◆**日時**：第１回　平成 30 年１月 23 日（火）13：30 ～ 15：30（開場 13：00）
　　第２回　平成 30 年２月 13 日（火）13：30 ～ 15：30（開場 13：00）

◆**申込**：当日直接会場へお越しください。（入場無料）